

《清の内乱とロシアの東アジア侵略の準備》

<明治28年7月6日>

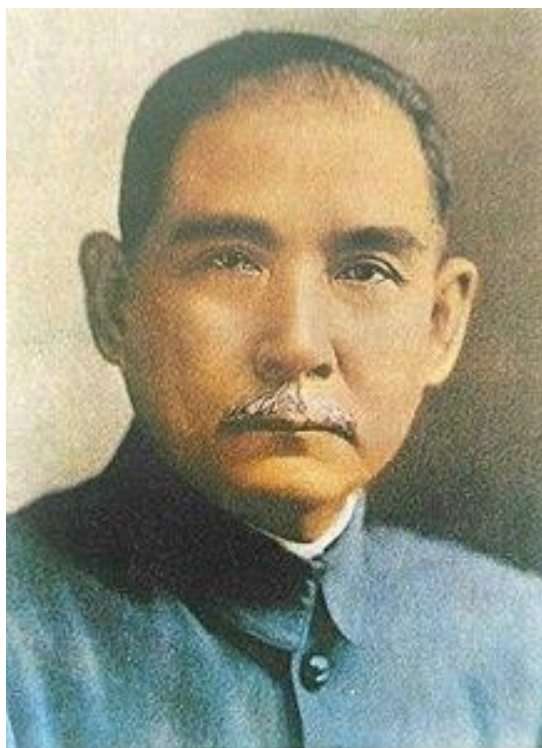
日本が三国の干渉により苦渋の日を過ごす時期に、せっかく清を朝鮮半島から追い払った途端に、世界最強と言われるロシアを引き入れた閔妃（びんひ 李氏朝鮮第26代王 高宗の妃）一族がクーデターを起こし政権を奪還した。

<明治28年10月8日>

甲午改革（李氏朝鮮で1894年（干支で甲午）から1895年にかけて行われた急進的な近代化改革）をクーデターで潰した（ロシア公使カール・イバノビッチ・ヴェーバーとロシア軍の力を借りた）閔氏一族に対する反発から閔妃暗殺事件発生。国王高宗は犯人全員とその家族子供に至るまで処刑した。

<明治28年10月26日>

清王朝打倒をめざし、孫文が広州で武装決起したが失敗、日本に亡命。頭山満をはじめ多くの日本人が孫文を支援する（1897年、宮崎滔天の紹介によって政治団体玄洋社の頭山満と出会い、頭山を通じて平岡浩太郎から東京での活動費と生活費の援助を受けた。また、住居である早稲田鶴巻町の2千平方メートルの屋敷は犬養毅が斡旋した）。



孫文

<明治29年 6月3日>

露清密約。日本は密約のため、ロシアと清から敵国にされた事は知らず、23年後の大正11年のワシントン会議で支那が公表した為に知った。しかし、清からの留学生は明治29年には13人だったものが、ピークの明治39年には3万人に達し、清が崩壊した後に成立した政府官吏の半数以上が日本留学生、軍部も日本留学組が牛耳っていた。明治38年に科挙制度が廃止されてからは特に日本留学が士官の登竜門になった。その影響はあらゆる分野に及び、明治39年から清国は教科書検定を行い、日本の小・中学校の教科書や参考書を翻訳したものが多かった。現在の支那語には夥（おびただしい）日本語が使用され、日本語を抜きにすれば文章にならないのはこれが原因である。ここで育った人材がなければ、後の**辛亥（しんがい）革命**は起こり得なかった。

注1) 清国留学生

小説家の魯迅（ろじん）が有名だが、他に秋瑾（しゅうきん）、鄒容（すうよう）、陳天華（ちんてんか）など後に辛亥革命に参加した人物が多数留学している。

注2) 和製漢語

中華人民共和国のうち、元々支那にあった言葉は中華だけで、人民も共和国も日本から輸入した和製漢語であることが有名。その他、文化、文明、民族、思想、法律、経済、資本、科学、物理、時間、理論などがある。

注3) 辛亥革命

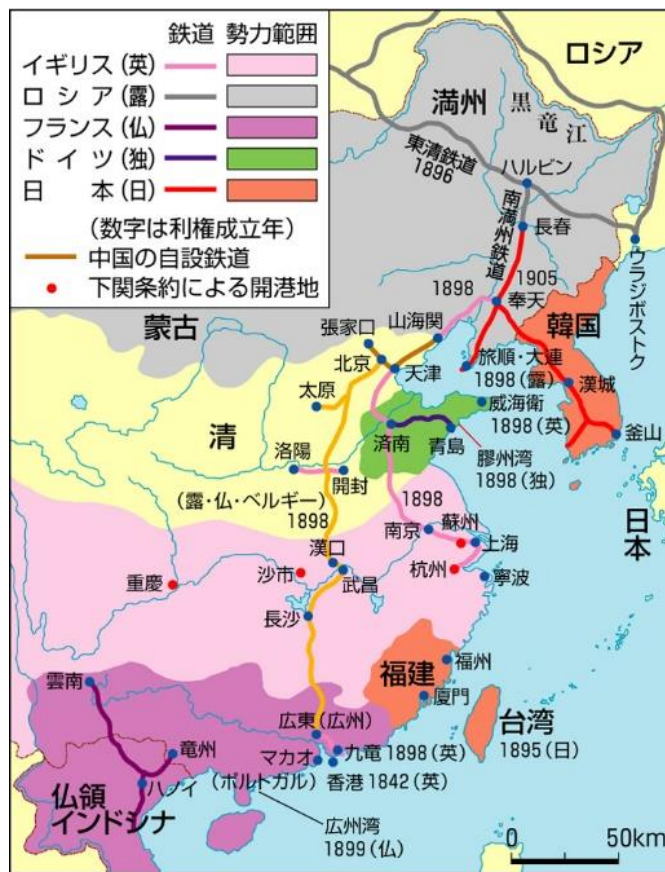
1911年10月に孫文の影響を受けた革命軍が武昌と漢陽を武力制圧し、黎元洪を都督として中華民国軍政府が成立を宣言した。清国は革命軍の制圧に失敗し、15省が次々と独立を宣言した。1911年12月29日、上海で孫文が中華民国大總統に選出され、1912年2月12日に溥儀が退位し、清国は滅亡した。この結果、アジアにおいて史上初の共和制国家である中華民国が誕生した。

<明治29年12月>

ロシアが旅順・大連までの鉄道施設工事着手、いよいよ日本との戦争準備と東アジア侵略へ牙をむく。

<明治30年秋>

山東省でドイツ宣教師二人が殺害される事件発生。三国干渉で日本を追い出した列強は清を侵略する口実が出来た。ドイツはすぐに行動に出て山東省、英は揚子江流域、仏は広東・江西・雲南に独占的特殊権益を獲得する。日本を追い出した西欧列国は見事に遼東半島を獲得し、支那を侵略した。



日露戦争直前の中国

清、日本に改革援助求める。改革失敗

<明治31年6月11日～明治31年9月>

日本と英国を後ろ盾にしロシアの侵略阻止に動く光緒帝の改革派と、ロシアを後ろ盾にした李鴻章、西太后の守旧派の内部権力争いが生じた。康有為が日本の明治維新を手本に「日本明治政考」を著し、梁啓超（りょうけいちよう）等も参画し政治改革を目指した。光緒帝も同意し「明定国是」の勅令を發し政治改革を始める。日本国に対し、帝は内務大臣劉学洵（りゅうがくじゅん）に国書を託す。

国書に曰く「朝鮮の役（東学党の乱）では風雪に誤り、よしみを捨てたが、実はこれは朕の意志ではなかった……貴国の治世にならって国家自強の基としたい」と友好関係を求めた（皇帝の責任逃れの言い訳にしか過ぎない）。しかし清の皇帝の意思とは逆に、最高実力者李鴻章はロシアに国を売るなど臣下の裏切りはその後も続き、この国を破滅の方向に追い込んで行く。

<明治31年 9月19日>

西太后によるクーデターで「光緒帝」、「康有為」らの改革は潰される。改革を進めよう

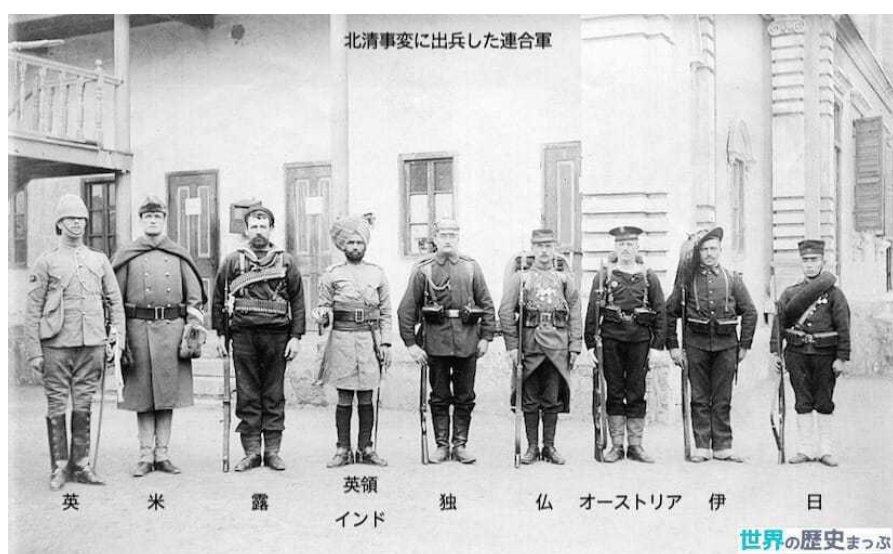
とした「帝」を退位させようとする動きを察知した「光緒帝」は、高官の袁世凱（えんせいがい）に兵を与えたが、自己の欲に走り帝を裏切り、西太后一派のクーデターに加担した結果、帝の改革は「百日維新」で終わった。改革に参画していた梁啓超、康有為は伊藤博文の内命もあって日本に亡命を許した。

北清事変起こる

<明治31年3月>

清とロシアは「旅順・大連の両港の租借に関する条約」を締結する。その結果、シベリア鉄道は明治35年に完成し、東アジア支配の体勢を整えることになる。これに対し清国政府はほとんど無抵抗であったが、代わって「反列強」のノロシを上げたのが「義和団」という宗教的色彩を帯びた、拳法修行集団から生まれた結社である。「反キリスト教」を鮮明にしたが、それはキリスト教こそ各国の侵略の先兵として庶民生活を苦しめていると見ていた為である。その為各地で教会を襲うなどし始めた。

清政府は当初、英・米・ロシアなど11ヶ国に義和団鎮圧（明治33年5月）を要請し、「匪賊」として弾圧した。しかし義和団が「扶清滅洋」を掲げ政治性を増していくと、次第に手を結び、結局、明治33年6月21日、8ヶ国に清国の西太后は宣戦布告し、白人宣教師200人以上、その子供50人、それに2万人を越える支那人キリスト教徒が殺害された。最初連合軍は清国の抵抗が強く北京に入れず天津に引き返すほどだった。しかし7月半ばに日本が英国などの要請を受け、約2万2千の兵員を送り込むと攻勢に転じ、8月中旬、8ヶ国連合軍が北京制圧に成功する。西太后は光緒帝を連れて西安に逃亡、北京市内は無政府状態になった。その後の蒋介石が南京市民を置き去りに逃亡するようなことは、日本では凡そ考えられない。支那の特徴である。連合軍は北京に入り、各国は決められた地区を管理した。



日本は紫禁城の東を受け持ち、その地区の平穏が保たれた。日本以外の地区は占領軍自体が「兵匪」となって乱暴狼藉を働き、市民は外にも出られない状態であった。この地区の長官が有名な北京公使館付武官柴五郎中佐である。義和団軍20万が諸外国公使館に対し攻撃をしかけてきたのが世界的にも知られた「北京籠城」である。この公使館区を死守した主役は日本守備隊であり、特に柴中佐の活躍は群を抜いていた。北京市民にも神として尊敬され、ロンドンタイムスは『「公使館区域」の救出は日本の力によるものと全世界が感謝している。列国が外交団の虐殺や国旗凌辱を免れたのはひとえに日本のお蔭だ。日本は欧米列強の伴侶たるに相応しい』と書いている。英国人が猿と思っていた日本人に感謝した。これが明治35年1月30日に結ばれる日英同盟が成立する要因となった。彼は日本人の武士道精神を身を持って世界に示した功労者でもある。日本人はこの柴五郎中佐の名前は記憶に留めておいてほしい。



注) 北京籠城は後に「北京の55日」というタイトルで映画化された。伊丹十三が柴五郎を演じている。

<明治33年10月8日>

孫文は惠州蜂起を指示したが失敗。

<明治33年11月>

第二次ロシア・清密約に基づきロシアは満州全域を支配下に置く。火事場泥棒はロシアの国技か? 列強が「北京制圧」にくぎづけになっているその隙をロシアは大軍をもって満州に侵入し、全満州の占領を完了、電光石火の早技で朝鮮も支配下に置いた。第二次露清密約に基づいての行動である。即ちロシアは大連と旅順を租借すると、東清鉄道と支線のハルピンと遼東半島を結ぶ鉄道の敷設権を清から得て建設していた。その鉄道を守るという理由でシベリアから大軍を南下させており、北清事変終了後もそのまま駐留を続け「露清条約」により駐留を半永久的にしようとした。次は半島の永久支配だ。そうなると日本は存亡の危機に立たされる。それがこの時代の「常識」だった。日本の加藤高明外相らはただちにロシアに抗議、ロシアも露清条約の締結を断念する。日本が世界の大国に行っ

たはじめての「抗議」であった。それでもロシアは駐留を止めようとしなかった。

<明治34年4月> 支那駐屯始まる

北清事変の北京議定書に基づき、日本軍は邦人保護の目的で支那駐屯軍が発足し、天津に司令部を置く。列強各国も支那に自国民保護のため議定書に基づき9月には駐留する。

<明治34年11月7日>

清国の李鴻章死去。袁世凱が指導的立場に立ち李鴻章の時代が終わる。混乱は深まり孫文らを中心に革命勢力が台頭する。

<明治35年1月30日>

日英同盟成立。英国は北清事変での柴五郎中佐の活躍による日本の行動から国を分析し、日本は同盟に値すると判断した。協定は多岐の分野に渡った（地方政治・法律・裁判等。）

<明治37年1月6日>

ロシアは日本との外交交渉を拒否する。日本は清に対し、朝鮮の独立と領土保全を求め、ロシアと交渉するも、拒否される。

<明治37年2月10日>

日本はロシアに宣戦布告する（宣戦布告の詔書）。ロシア陸軍は日本の15倍・海軍は3倍。

今も昔も朝鮮半島が如何に日本の存亡に影響があるのかを地政学的にも、歴史的にも学んできた。日本にとっては、この半島は今も実に「やっかい」な存在ではある。

さて北清事変の隙を突き、全満州を占領したロシアは「第2次露清密約」による鉄道を守るという理由でシベリアから大軍を南下させ、満州の半永久の駐留と共に朝鮮半島の永久支配を狙っていた。日本の抗議で露清条約を断念はしたが、ロシアは満州の駐留を止めようとしなかった。次に狙うのは朝鮮半島だ。半島南部にまでロシアの勢力が固定化されると、日本は確実に存亡の危機に立たされる。このような思考は弱肉強食の帝国時代には世界の常識だった。

平成27年5月6日

志雲会塾長 有馬正能